ワルシャワ日本人学校における副読本「チェシチポルスコ」の活用と実践

前在ポーランド日本国大使館付属ワルシャワ日本人学校　教諭
北海道虻田郡真狩村立御保内小学校　教諭　金　本　真　一

キーワード：在外教育施設、副読本、教育課程、国際交流

１．はじめに

ポーランド共和国はヨーロッパの中央に位置している。緯度が高いために日照時間や気温の変化が大きく冬の寒さは厳しいが、新緑の季節は花が咲き乱れて大変美しい。ポーランドという国名は、平野を意味する「ポーレ」という語に由来し、広大で豊かな大地が広がる。

ワルシャワ日本人学校には小学部と中学部が併設され、児童生徒数は20人前後を推移している。昨年創立40年を迎え、10年ごとに副読本「チェシチポルスコ」（チェシチ＝やぁ、ポルスコ＝ポーランドの意）の改訂を行っている。今回は、そのチェシチポルスコの活用と実践について報告する。

２．チェシチポルスコについて

(1) チェシチポルスコの概要

チェシチポルスコはポーランドの地理、歴史、現地の生活についてまとめた資料集である。創立20年の際に社会や総合的な学習の時間に活用できるよう発刊し、以降10年ごとに改訂を重ねている。執筆は在職の教員たちで、現地スタッフの力を借りながらできるだけ正確な情報を提供できるよう心がけた。

大きくは２つの側面を持つ。

小学校社会副読本としての役割

小学３年：「学校のまわり」「ワルシャワ市の様子」「人々の仕事と暮らし」

小学４年：「ごみのゆくえ」「水のゆくえ」「安全を守る仕事」

小学５年：「ポーランドの国土」「ポーランドの産業」「情報産業」

小学６年：「ポーランドの歴史」「ポーランドの政治」

現地理解教育における補助資料の役割

「ポーランド語を覚えよう」「ポーランドの国旗・国歌」「ポーランドの偉人」「祝日」「食事」「ことわざ」「ポーランドの小学生の一日」「ポーランドの世界遺産」「特色ある街紹介」「ワルシャワ市紹介」「日本とポーランドの関係（歴史等）」

また、「ワルシャワ日本人学校の歴史」「2017年１月～12月の行事の写真」も掲載した。

(2) 現状の課題

今までこの副読本を活用しながら、社会や総合的な学習を展開していたが、派遣教員が年度によって入れ替わる状況の中、なかなか継続的な取り組みができていない現状にあった。また、40周年を向かえ改訂するにあたり現地校との交流などにも活用できたらと考えた。

(3) 取り組み内容

①現地校9STO校との交流活動に生きるチェシチポルスコの活用

現地校9STO校とは、年間４回、過去10年にわたり交流活動を続けている。うち２回は本校に招き日本文化などを紹介し、２回は現地校に赴きポーランドの遊びや文化を学んでいる。その際に、チェシチポルスコを

活用し、交流の一助にしたい。

②学校の教育課程に生きる「チェシチポルスコ」の活用

生活科・総合的な学習の時間を使い、1年を通してチェシチポルスコを活用しながら探求学習を展開していく学習方法を確立する。また、社会科の学習の中で「いつ」「どこで」「どの場面で」活用できるか、次年度以降意識しながら学習を行い、記録することで本校独自のカリキュラムマネジメントに生かす。

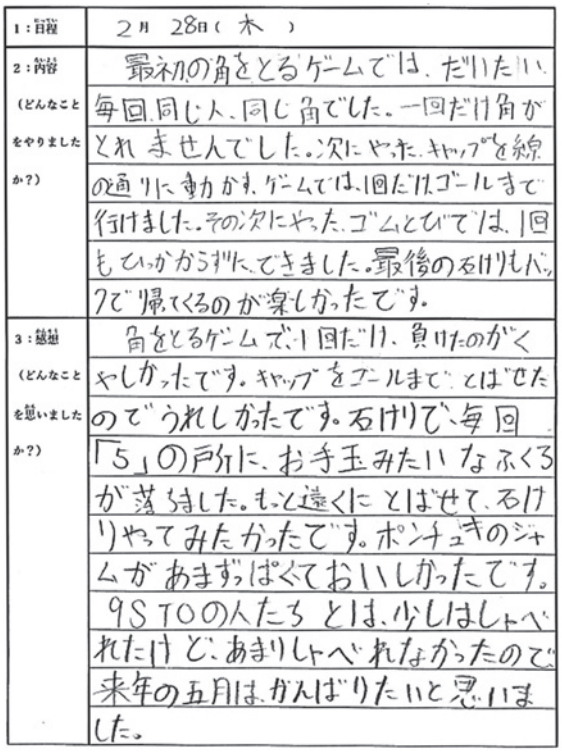
(4) 成果

①9STO校との交流活動に生きるチェシチポルスコの活用について

チェシチポルスコの中には、ポーランド文化に触れている箇所がある。今回は2月の「脂の木曜日」にちなみ、それにまつわる劇を現地校にしてもらうことになった。計画段階において、チェシチポルスコを事前に見せ、その内容に合わせた交流をしてもらえるように打診したからである。今までは、交流内容は相手に任せてしまい、積み上げが図れていなかった。今回を機に、次年度以降の交流の際にもチェシチポルスコをベースに交流内容を検討していくこととなった。時間の都合で劇は次年度実施となったが、お互いに文化のどのことを知りたいのか、理解しあいながら交流を図る第一歩となった。

また、継続した交流活動を展開していくにあたり、児童生徒のモチベーションのためにも毎回の活動の後、振り返りを確実に行うこととした。

相手のあることだからと、なかなか積みあがっていかなかった活動を継続的なものにすることができた。



1：日程	2月 28日（木）
2：内容（どんなことをやりましたか？）	最初の角をとるゲームでは、だいたい毎回同じ人、同じ角でした。一回だけ角がとれませんでした。次にやったキャップを線の通りに動かすゲームでは、1回だけゴールまで行けました。その次にやったゴムとびでは、1回もひっかからずにできました。最後のなげりもバッグで帰ってくるのが楽しかったです。
3：感想（どんなことを思いましたか？）	角をとるゲームで1回だけ、負けたのがくやしかったです。キャップをゴールまでとばせたのでうれしかったです。なげりで毎回「5」の所に、お手玉みたいなふくろが落ちました。もっと遠くにとばせて、なげりやってみたかったです。ポンチュキのジャムがあまずっぱくておいしかったです。9STOの人たちとは、少しはしゃべれたけど、あまりしゃべれなかったので来年の五月はがんばりたいと思いました。

振り返りを行うことで、次の活動への意識付けがなされた

事前学習の様子

現地の遊びを教えてもらう

②学校の教育課程に生きる「チェシチポルスコ」の活用について

今回の取り組みにあたり、海外子女教育財団グローバル教師事務局が行っている「教育実践研究」支援プロジェクトへの参加を行った。

今回のチェシチポルスコについて助言していただいた講師の先生とともにもう一度見直すことで、この副読本が社会の学習に密接に関わっていることを改めて学ぶことができた。また、後半のポーランドの文化についての紹介は生活科や総合的な学習の時間に活かせる情報量を確保していることも見えた。

今まで各教科担任（ワルシャワ日本人学校は教科担任制をとっている）に任されていた活用方法を、「積極的に活用するもの」と位置づけ、それを活かした取り組みについては記録していくこととした。そうして毎年

蓄積された情報を参考に、より効果的な活用ができるものと考えた。50周年の際に副読本であるチェシチポルスコが改定されるのであれば、そうした情報を基に、より学びに生かしやすいものにしていくことも可能であろう。

また、並行して各担任に任されていた総合的な学習の時間（低学年は生活科も活用して）にて、チェシチポルスコをベースに調べ学習に取り組んでいくことも提案した。毎年帰任する教員と着任する教員が入れ替わる在外教育施設に於いて、基本的な学習計画が定まっていないのは大きな負担である。そうしたジレンマを解消するべく、チェシチポルスコをベースに１年間の学習活動を展開できるような形を考えていくこととなった。

そして、学習発表会や各種交流会にもその学びを関連付けることができるような計画にしていくことが今後の課題である。そうした効率化を図ることで、各担任はもちろん子どもたちの負担感も減らすことができるだろう。

合わせて…「副読本を使った年間カリキュラムの作成」
各教科担当に任されていた現地理解教育の時間、内容を「この時期、この単元、この内容にて学習する」という年間カリキュラムを作成していきたい。

時期・学年	教科	学習内容	使用ページ	備考
12月　3年	社会	「ワルシャワの地図を作ろう」 ワルシャワの町全体の地図を作成するのに活用した	P19	
2月　3年	社会	「昔の道具の年表を作ろう」 自分たちの住んでいるワルシャワで使われていた昔の道具を調べた		

上記のような年間カリキュラムを継続して作成してくよう提案した。

３．終わりに

在外教育施設は人の入れ替わりが激しく、１年目の派遣教員は自分の生活を安定させるために必死になってしまう。３年目の人間は帰任してしまうので、大きな変化を伴う提案をすることは気が引けてしまう。そうしたジレンマを持つ在外教育施設において、年度をまたいでの継続的な取り組みをすることは必要であると思う。

特に、ワルシャワ日本人学校は児童生徒が少ない学校である。派遣教員の人数も少なく、小回りの効く教育実践が展開できる。前年度踏襲の形だけではなく、派遣された教員が伸び伸びと教育実践に取り組めるようなシステム作りの一助になったと考える。

また、財団の教育実践プロジェクトには大変お世話になった。今回の講師の先生のご指導で、私も含めて継続的な取り組みをするという意識を持てたことは、ワルシャワ日本人学校にとって大きな意義があったことと感じる。

最後に、このような実践報告集を作ることの大きな意義を帰国したからこそ感じる。派遣されていた任期の間は目の前のことで精一杯であった。帰国してから、派遣期間中に得たものをどのように還元していくか、そこが重要であると感じる。派遣された教員の中で、こうした報告を出していない方もいるように見受けられる。還元の仕方は様々であろうが、１人でも多くの方が実践報告をすることに意味はあると思う。

私の拙い実践を一読した派遣前の教員が、派遣後に実践報告をしてくれることを願って筆を置く事とする。